

当たり前の日々を月夜が照らす。

なあ～やん

当たり前の日々。

目が覚めれば、キラキラと目を劈く太陽が見えた。思わず額に手をかざして、その光が目には直射するのを防いだ。

何故、平凡な高校生である俺、山田（やまだ）啓介（けいすけ）が、そのようなアニメ主人公のようなことをしているのか。

俺自身でもまだ納得いかなかった。

「ちくしょお、とりま朝飯でも……」

———何かに引かれた気がした。

太陽の方を見ると、ささやかれている気がした。だから俺は、ベッドから起き上がることすらできなかった。

めっちゃくちゃ狭い部屋に太陽が差し込むと、何故か少しだけ部屋が広く見える。だが、毎朝見るその不可思議な現象を、今日、俺は見られなかった。

見る暇が、なかった。

頭の中に流れ込むのは恐ろしい程の記憶。

まずは姫が着るような赤いドレスを着た銀髪の少女が、太陽のように煌めく炎の中で両手を握り合わせて静かにたたずみ、命火を消していく情景。

次に鎧を着た女騎士であり、銀髪をひとつに結った少女が、太陽の光を集めて魔術を繰り出した魔術師に死体も残らず焼き尽くされていく姿。

そして、小さな小さな女の子が、大きなお屋敷の外で燃え上がるお屋敷を見上げている情景。恐らくこの子の父親も母親も——。

学生服の銀髪の少女が、その鮮やかな髪の毛を引っ張られながら十人程度の人数から打撲を受け、それでも耐え続け、口元はいびつに歪んでいて、その体には太陽が差し込んでいた。

そして、そして。

腰まで長い銀髪を持ち、純白のドレスを着た女性が、王城を照らす月を見上げていた。

『月が、綺麗ですね？』

『そうでしょう、_____さま』

かき消された声が、赤子をあやすようにしかし俺の頭に存在し続けた。内容は分かっている。分かっているのに、鮮明に思い出せない。

決して聞いてはいけないような、そんな気がして。

「おえ……」

吐き気が、する。

太陽を直視できない。

何故だろうか、胃がきりきりと痛む。

平凡な高校生。ありきたりな苗字『山田』を持つ誇らしき凡人。高らかに名乗っていた『ソレ』はもう通用などしないことが分かった。

「あああああああ——っ」

覚えている。

覚えているのだ。

でも、思い出してはいけないのだ。

そう、誰かがささやいていたんだ。

そう。ささやいて、いた。

普通じゃない日々。

白城（しらしろ）月夜（つきよ）。

ずっとこの名前が好きではなかった。白い城を夜の月のように照らす。そんな意味合いが込められているように見えたから。

月のように華やかに夜を照らす。そんな意味が下の名前にはあったようだが、私には夜を照らすなんてできないのだ。

私は、生まれてすぐ病院に放り込まれ、その病院にすら秘匿されるような奇異な存在。人体実験に来る者がいないのが、まだ幸運だと思えるくらい。

たぶん私が大人になったら、人体実験に来る者達もいるのだろう。私は、その人達に抗う力すら持ち合わせていなかった。

今日も今日とて外に出ることを許されず、いつもきまっでご飯を運びに来る優秀で信頼されるナースにすら怯えられ、朝は太陽を見上げ夜は月をみる。

今日の太陽は輝いていた。

今日の月は少し曇っていた。

私は、その内気象を細かく暗示できるようになっていた。だが、その暗示を聞かせる者など存在はしない。

久しぶりに、太陽が輝いた。

不思議と、あの煩わしい記憶達は呼び起こされなかった。

代わりに――、

「これは、何なのでしょう」

至って平凡そうな、薄っぺらい顔をした高校生らしき少年の、日々の思い出が脳内に映し出された。

朝起きて輝く太陽を見てから、現在曇る月をみるまで、その後もずっとずっと同じだった。そろそろ眠たくなってくる今も。

あの煩わしい記憶達は失ってはいけない。だが思い返したくもない。

ほんの少しだけ、その記憶が消えたことが嬉しかった。

でも、冷静に考えてみれば私のこの記憶は、誰かの記憶。

私の記憶はその誰かに入っていて、この誰かの記憶はその人の中からごっそりと抜けてしまっ

ているという事なのだ。

つまり私のこの『体質』のせいで、誰かに迷惑をかけているのだ。

「いっ、いけないですね……」

前に、ここ『前凶病院』を抜け出したことがある。私専用の警報があったらしく、すぐに連れ戻された。そして待っていたのは院長の冷たい目と、両親からの暴言の嵐。私は夜なんて照らせない。両親すら照らせないのだから。

そんな存在である私が、果たしてもう一度抜け出すことができるのだろうか。

「できるできないではないのです、やるのです」

昔、言われたんだ。

他でもない、愛すべき『彼』に。

だから私は征くのだ。

たとえこの身が幾度業火に焼かれようとも、私には私の使命がある。それは使命を奪われた『あなた』が叶えなかったものだ。

だから私が代わりに叶えるのだ。

任務は違えども、使命を失い枯れはてて逝ってしまったあなたのために。

「怖い、など言っていないでね」

私が恐怖を感じる資格はない。

ああ、そうだ、そうか、私は人に迷惑をかける資格すらないのだ。

私は十七歳。

七年前にここを抜け出したことがある、本当なら高校生になっているはずの、少しだけ普通から外れた至って普通の少女。

私は明日、この世界で最も強敵に挑む。

物理じゃ返せない、精神の恐怖に挑むのだ。